

下顎リンパ節に発生した原発不明悪性黒色腫の犬の1例

○岩永優斗¹⁾、伊藤敏生²⁾、三上直樹³⁾、三上紗紀³⁾、寺内光彦¹⁾、岩崎遼太¹⁾

¹⁾KyotoAR 動物高度医療センター、²⁾かもがわ動物医療センター、³⁾みかみ動物病院

- はじめに：犬の悪性黒色腫は口腔や爪床などに好発し、転移性が高い腫瘍である。リンパ節に悪性黒色腫を認めた場合、近傍の原発巣からの転移と判断される。一方、人では原発巣が確認できない原発不明悪性黒色腫（melanoma of unknown primary：MUP）という病態が知られているが、犬での報告は乏しい。今回、下顎リンパ節に発生した MUP を疑う症例に遭遇したため、その病態について考察する。
- 材料および方法：症例は雑種犬、13 歳 1 ヶ月齢、避妊雌、体重 9.3 kg。左頸部皮下腫瘤を主訴に紹介受診（第 1 病日）。CT 検査では、病変は 19×45×37 mm 大に腫大した左下顎リンパ節であると考えられ、組織生検にて悪性黒色腫と診断した。また、右甲状腺に結節性病変を認め、肺野には転移病変を疑う複数の結節性病変を認めた。なお、身体検査を含め原発巣を疑う病変は認められなかった。第 8 病日に頭頸部リンパ節と右甲状腺を切除し、それぞれ左下顎リンパ節は悪性黒色腫、左内側咽頭後リンパ節はその転移、右甲状腺は濾胞腺癌と診断された。
- 結果：第 36 病日よりトセラニブを投与した。第 70 病日の CT 検査にて、肺転移の進行と右頸部皮膚の結節性病変を認めた。皮膚病変は切除生検にて悪性黒色腫の転移と診断された。第 91 病日より免疫チェックポイント阻害剤である抗犬 PD-1 犬化抗体を 2 週間隔で 5 回投与したが、転移病変は進行し、第 171 病日に死亡した。経過を通じて悪性黒色腫の原発巣となりうる病変は認められなかった。
- 考察：本症例では CT 検査を含む全身精査を繰り返し実施したが原発巣は確認されず、犬では報告の乏しい MUP に該当すると考えた。人の MUP の発生機序として宿主免疫による原発巣の自然退縮が想定されており、原発巣既知の悪性黒色腫と比較し予後良好の傾向が示されている。犬の口腔悪性黒色腫を例に挙げると、StageIV の局所治療後の生存期間中央値は 80 日との報告があるが、本症例は 171 日生存した。比較的長期の生存には MUP の性質や抗犬 PD-1 犬化抗体の関与が考えられる一方、病変縮小を認めなかったことから、リンパ節病変を含む転移病変は抗腫瘍免疫を回避した腫瘍細胞集団であった可能性が考えられた。今後の症例集積により犬の MUP の臨床挙動や最適な治療法について検討する必要がある。